武器と獣の狂想曲

朱鳥の巫女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武器と獣の狂想曲

【Ｎコード】
Ｎ８０８９Ｎ

【作者名】
朱鳥の巫女

【あらすじ】
主人公はごく普通の女子高生。
ある日、気がついたら神様の気まぐれで転生させられることになってしまった。
面白くなるように神様に与えられた力は少女が好きなお話、ソウルイーターのキャラクター、ソウルとマカの力。
ソウルの大鎌になる能力とマカの感知能力と退魔の波長。
力を与えられた少女はそのまま転生するはずだったのに、神様を慕う天使の一人が少女に嫉妬して、少女に呪いを与える。

黒血の呪い。
少女は蝕まれる狂気に耐えられるのか？
同じように神様の気まぐれで転生することになった少年と共に少女はどんな冒険をするのか！
舞台は海鳴　舞うは魔法と異能　観客は自分たち
さぁ、ｃａｐｒｉｃｃｉｏ（狂想曲）のはじまりはじまり！！

主人公「めんどくさい」
それ言っちゃだめでしょ！？

序章　魔武器になった女の子（前書き）

リリカルなのはにどこまでクロスを持っていけるかの実験作みたいなものです。
ａｒｃａｄｉａにも投稿しています。
好評いただいてそれなりに連載したらブログの方に番外編を載せようかとも画策中。
暇つぶし程度に見てください。

序章　魔武器になった女の子

それは本当に突然のことだった。

いつものように学校に行って、いつものように授業を受けて、いつものように帰宅する途中に目の前が真っ白になった。

別に黒猫が目の前を横切っても、靴紐が急に切れたりもしなかった。

事故にあいそうな子供も、自分に向って突っ込んでくるトラックも隕石もなかった。

本当になんの前触れも予兆もないそれを、私はただ呆然と受け入れるしかなかった・・・・・・

「ようやく目覚めたようだな。」

「・・・・・・え？」

私は気がつくと目の前に老人がいることに驚いた。

いや、老人よりも自分がいる場所に・・・・・・というのが正確だろう。

こういう時はなにもない真っ白な空間というのがお約束なんだろう

なぁと考える自分がいるけど、それは置いといて、まわりにはなにもないどころか巨大な図書館のようなところにいるのだ。
上を見れば天井が見えずそれと同じくらい高い本棚、前や後ろは壁が見えないほど長い本棚の廊下で、本棚自体にも本がぎっしりと詰め込まれている。
私は混乱しながらも目の前の老人を見る。
その老人はロマンスグレーと言っても過言じゃないくらい品の良さそうなスーツとステッキを持っていて、英国紳士と言われてもすんなり信じられるものだ。

「ふむ、英国紳士とは嬉しいのう。」

私がいろいろと考えていると、老人がいきなりそう言った。
私の考えを読んだかのように。

「ふふ、君の考えるように私は君の表層意識が聞こえているのだよ。」

なるほど、それならこのまま声を出さずに会話をしても問題ないだろうか？

「いや・・・・・・わしとしてもそれは別に構わないが・・・・・・君はいやではないのかのう？知らぬ人間に思考を読まれるというのは」

別にそんな不都合なことは考えてないし、表層意識だけなら問題ないよ。

「・・・・・・なかなかに豪胆な娘だのう。まぁよい。わしはこの世界図書館の館長兼司書をしているものじゃ。」

世界図書館？

「世界図書館とは文字通り、世界を本として管理しておる場所のことじゃ。」

老人曰く私たちの世界含めて世界というのは一冊の本で、ここはその本を管理する場所なんだって。平行世界も一冊の本になるから似たような本がゴロゴロあるみたい。
実際に私の周りの本棚の本が勝手に移動したり分裂するように増えていってるから、信じるしかなさそう。
というか、私がこんな場所にいるということは、私死んだのかな？
心臓発作とか脳梗塞とかで？

「理解が早すぎるのも複雑じゃな；普通、自分が死んだとか考えてそのようにマイペースになれるようなものじゃないのだがのう。」

無駄に騒ぐのもちょっと疲れそうだから。

「・・・・・・・・・ま、まぁよい。おぬしがここにおるのはわしが呼んだからじゃ。理由としては単に暇つぶしじゃよ。」

・・・・・・こんな小娘になにをしろと？

「なぁに単に別の世界に転生して好きにしてくれたらよいのじゃ。そのための能力もおぬしに授けるしのう。世界の中にはおぬしの好きなマンガやアニメ、ゲームの世界もあるから選り取りみどりじゃぞ？」

ふむ・・・・・・拒否する！

「な、なに！？運次第であんな能力やこんな能力などが自由に使えるのだぞ！？おぬしの他にもたくさんの人間を他の世界に送ったが、みな例外なく二つ返事で引き受けたのじゃぞ！？」

ぶっちゃけ面倒くさい。

「め、めんど・・・・・おぬし本当に豪胆でマイペースじゃのう。それに選ばなければ、おぬしこのまま帰ることができんぞ？」

それって最初から拒否権与える気ないじゃない。仕方ないわね、それで貰える能力にはなにがあるの？

「おぬしがこの中から選んだ本の能力を授けるのじゃよ。例えばＦａｔｅの本ならば魔術や黄金率などのスキルからキャラクターの姿かたちなどじゃな。ま、貰える能力はランダムだが高確率でメインキャラの能力があたえられるぞ。」

私は説明を聞いて周りの本を見渡した。
本の背表紙には特になにも書かれておらず、本自体も茶色や赤色、黄色などの色がついているだけで表紙もなにもない。
中を見てもいいかと聞いたが、それはその世界のアカシックレコードに触れるようなものだから人間にはオススメしないらしい。
私はしばらく考えて、丁度目の前を横切った本を掴んだ。
眺めていても仕方ないし、これでいいか。

「その本にするのかの？」

ええ、これでお願い。

「よし、コレはソウルイーターの本じゃな。与えられる能力は・・・・・・ほ、珍しい二人分の能力じゃな。」

ソウルイーターってガ○ガ○の？

「そうじゃよ、その中の主人公であるソウルイーターとマカの能力じゃよ。魔武器の能力と退魔と魂感知能力じゃ。」

・・・・・・当たりなのかハズレなのか良くわからないわね。

「ほほ、この能力でどう動くかはおぬし次第じゃ。して、転生する世界は・・・・・・これでいいかの？」

老人は、無造作に本を掴むとその本を開いた。
それと同時に本から大量の光が溢れてきて、私は思わず目を瞑ると同時に意識が遠くなる感覚に逆らえなかった。

「おぬしがどんな人生を行くのか・・・・・・楽しみにしておるぞ。」

そんな老人の言葉を最後に私の意識は完全に途切れた。

???視点

女の子が転生しているのを物陰から見ているものがいた。
二人からは見えないように慎重に隠れながら、厳しい目で女の子がいた場所を睨みつけているのは図書館の司書を髣髴とさせるような妙齢の女性であった。

「悔しい・・・・・・！今まであの方は男しか選ばなかったのに、今回に限ってあのような女など！」

女性はしばらく嫉妬に燃えていたが、不意に彼女の目の前に先ほどの少女が手に取った本が横切り、女性はそれを掴んだ。
女性はそれをなんとなくパラパラと呼んでいると気になる項目を見つけた。

「これは・・・・・・おもしろそうね。」

女性は本の中の一文を指で軽く撫でると、その文字が光、少女の後を追うように消えていった。
女性はそれを見送ると、本を放り投げてすぐに踵を返す。

「これであの女の人生は少なくとも悲惨なものね・・・・・・フフフフフ」

後に残った本のページには『黒血』と書かれていた。

序章　魔武器になった女の子（後書き）

次のとあわせて一つの序章です。
続けてお読みください。

序章　王獣になった男の子（前書き）

前話とあわせてどうぞ。

序章　王獣になった男の子

それは本当に突然のことだった。

俺はいつも通りに学校に行って、部活をやって、友達と一緒に遊んで、いつものように家に帰る。

今日もそんな風に何事もなく当たり前に過ごすと思っていた俺は、突然目の前が真っ白になった。

俺は思わず体をひねり、回し蹴りのようなフォームで回転すると俺の脚に何かが当たった。

ドゲシッ

「げは！！！！！？？？？」

「あれ？」

なんか蹴っちまった・・・・・・って爺さん！？

「うわぁぁ！！だ、大丈夫か爺さん！！？」

ロマンスグレーが似合いそうな爺さんが倒れている。

俺は急いで抱き起こすが、なんか虫の息っぽいんですけど！？

「うう・・・・・・い、今までいろんな奴を召喚したが・・・・・・・・直後に回し蹴りを食らったのは、おぬしがはじめてじゃ・・・・・・・ガク」

爺さんが気絶して、俺は呆然としながらも爺さんを起すのに躍起になりました。

偶然で殺人なんか俺は嫌だぞ！？

「まったく・・・・・・・えらい目にあったぞ。」

「それについては謝るけど、人を娯楽のために殺した奴に言われたくねぇ。」

あの後、なんとか爺さんを起した俺は事情を説明させて、こみ上げる怒りを抑えながら睨みつける。

爺さんは俺の睨みなんかまるで気にせず、本を選べと迫ってきた。

そう言われても、どの本も同じに見えるしどんな能力をもらえるのかも解らない。

これがテンプレの転生ものなら好きな能力をもらえるんだろうなぁ・・・・・・

俺は適当に本棚から本を引っ張り出すと爺さんに渡した。

「これでいいのか？」

「どんだけ見ても見分けなんかつかねぇんだから、運任せしかないだろ。」

爺さんはそれを聞いて、それもそうじゃと呑気に言いながら、本を開く。

いい能力が当たればいいんだがなぁ。

「これは、獣の奏者の本だのう。能力は王獣の能力。」

「へ？獣の奏者って・・・・・・・女の子が獣操ってなんか戦争に関わる話だったっけ？」

うーん、一回読んだだけだからなんか知識が曖昧だな。

「なんかいろいろと省いとるが、概ねそんな感じじゃな。おぬしはその中の王獣に変身する能力が与えられた。それに伴って、獣を使役できるぞ。王獣は概念的に獣の王じゃからな。」

「いや・・・・・・王獣って王の獣って意味じゃなかったか？」

獣の王と王の獣・・・・・・似ているようで大分違うぞ。

「そこは概念的なものと言ったであろう。細かいことは気にするでない。それで転生する世界は・・・・・・ここでいいじゃろ。」

爺さんはそう言うと飛んできた本を取ると、本から光が溢れて俺は意識が遠くなっていくのがわかった。

「頑張ってわしを楽しませてくれよ。」

それを最後に俺の意識は完全に途切れた。

「ふむ・・・・・・これはそろそろ転生者が増えてきたの。次の転生者は別の本に送るかのう。」

老人がそう言いながら先ほど男の子と女の子を送った世界の本の表面を撫でると、先ほどは何も書かれていなかった表紙に文字と数字が浮かび上がっていた。

その本にはこう書かれていた。

魔法少女リリカルなのは　　転生者数１３５７８７５２人

序章　王獣になった男の子（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
次回からリリカルなのはの世界での生活がはじまります。
しばらくは現状把握と説明になりそうです。

説明しましょ、そうしましょ（前書き）

女の子ｓｉｄｅのお話。
いろいろと説明中。

説明しましょ、そうしましょ

女の子視点

徐々に視界が晴れていく。
白いもやもやした目の前が急に形や色がつき始めたのを私は感じた。
そうやって完全に見えるようになってはじめてみたものは・・・・・・

「あら、あなたも転生者なのね。はじめまして、あなたの母親のエリナ・エヴァンスよ。」

なぜかｈｏｌｉｃの壱原侑子さんそっくりの人でした。
ｈｏｌｉｃの世界に送られたのかと思ったけど、しかし、名前が違うから別人・・・・・・だと思う。
それから体が思うように動かないことから、やっぱり赤ん坊からやり直しだと気づいたのはそう遅くありませんでした。

「聞きたいことはたくさんあるだろうけど、一つずつ説明してあげるわ。」

侑子さん・・・・・・じゃなかったエリナさん？に説明されて、私は大体自分のおかれた状況を把握した。

この世界は私が想像したようなｈｏｌｉｃの世界なんかじゃなく、海鳴という地名や翠屋という喫茶店があることからリリカルなのはの世界の可能性が高いとのこと。
なぜ可能性なのかと言うと、この世界には高町家はあってもまだ高町なのはの姿が確認できていないことから推測されるらしい。もし

かしたら、なのはの父である士郎さんが死亡するとらはの世界の可能性も捨てきれないからね。
エリナ・・・・・・ここでは母さんと呼んだほうがいいかもしれない・・・・・・母さんがなぜ生まれたばかりの私が転生者か解ったのは、感覚らしい。
私も最初は解らなかったけど、なるほど、なんとなく母さんも同類なんだと本能の部分でわかる。

「それに転生者が子供を作ると高確率でその子も転生者だっていうのは私たちの常識になっているもの。」

常識？常識になるほど転生者っているの？

「そうね～・・・・・確認連絡がとれているのだけでも、５０万人はいるのよ。ネットなんかでも専用のコミュニティサイトなんかもあるの。それでみんなと情報を共有して、危険回避なんかに利用しているわ。」

危険回避？転生者って原作に介入しようとしているイメージが強いけど・・・・・・

「あなたがそう思うのは無理ないわね。転生者と言っても千差万別。コミュニティサイトもさまざまな派閥が出来上がっているわ。私が属するコミュニティは二度目の人生を精一杯生きることを主目的にしているのよ。与えられた能力を使うかどうかは本人の自由意志に任せられているわ。その代わり、自分が負った責任は極力自分で背負うこと。助け合うこともあるけれど、基本は自己責任よ。」

厳しいのか、そうじゃないのか解りづらいわね。

「そうね。でも、私たちのコミュニティは原作介入派でも否定派でもないの。普通に人生を歩んでいるときに偶然関わっても、特にお咎めはないの。友達づきあいもライバル競争も自由にやっていいのよ。そりゃ、知識を使って社会を操作、支配しようとするのはさすがに止めるわ。ハーレムなんかも男の夢であるかもしれないけど、それはお話の中だから許されることであって、現実では通用しない。私たちはここで生きて、心をもっているのだから相手も心を持っている。それを忘れないでね。」

・・・・・・つかぬことを聞くけど、母さん。

「なあに？」

赤ん坊であるはずの自分と当然のように会話しているのはなぜ？あと、どうして自分を男前提で話すの？

「あら、仮にも私は劣化しているとはいえ壱原侑子の姿かたちと能力を与えられているのよ。読心術くらいはできるわ。後半は、今までの転生者は全て前世で男であるから・・・・・・今のあなたは女の子だけど・・・・・・もしかして前世も女の子？」

そのもしかしてだよ、母さん。

「あら、すごい！今まで男しか確認できていなかったのに、前世でも女の子なんて恐らくあなたしかいないわ！良かったわ、ＴＳ転生した子にこれからの女の子の生活を叩き込まなくちゃと覚悟していたもの。私も散々、お母さんを悩ませていたもの。」

へぇ、母さんって前世男だったんだ。もしかしておばあちゃんも？

「そうね、記録だけでも家は２００年も転生者を出している家よ。普通の子も生まれているけど、一代の間に必ず一人は転生者が生まれているの。それで先の転生者が後の子に生活のことや現実のことを教えているの。中には俺ｔｕｅｅｅｅ！や自分主役！なんて勘違いしている子もいるもの。私たちはあの管理人の暇潰しで転生している、だからせめてもの抵抗で現実を真っ当に生きることを心情にしているのよ。」

あ、それは納得。
英国紳士に見えるけど、やっていることって外道だよね。

「わかってくれて嬉しいわ。」

そうやって母さんは綺麗に笑った。
女の私でも綺麗と思える笑顔だ。
少なくとも女に転生して、子供を作ったことに関してなんの負い目も感じない。
私もそんな風に笑えるようになるのだろうか。

あれから3年経ちました。
え？唐突過ぎ？赤ん坊時代をだらだらやっても喜ぶ人はそんなにいないので省きます。
ちなみに私の名前はソウル・エヴァンスとなりました。
母さんに能力のことを話したら、苗字もエヴァンスだから丁度いいとばかりに付けられたのです。
別に男でも女でも違和感のない名前だからいいですけど。
それから母さんのコミュニティの人ともそれなりの挨拶して、体を動かせるように鍛えたり、勉強したりしてそれなりに充実しています。
ですが最近、私はあることが気になります。

「母さん、父さんっているの？」

そう父さんの存在です。
動けるようになって家の中をうろうろするようになって、この家がまんま壱原侑子の『店』と同じ外観作りになっているのはわかった。
（家に関しては母さんの趣味と判明）
それで家の中はそれなりに広いのだが、なぜか私と母さんしかいない。
単純に会わないというのではなく、本当に私と母さんしかこの家にいないのだ。
写真かなにかあればいいのだが、アルバムらしきものは本棚でも手の届かない場所にあり、なにかに上っても届かなくて手が出せない状況だ。
仏壇とかはないから故人というわけでもなさそうだ。

なので、堂々と母さんに聞く。

「あら、いるわよ。そういえば話していなかったわね。」

そう言いながら母さんは私の手に届かなかったアルバムをとって開いてくれた。

そこにはＴＯＦのラスボスさんが母さんと仲良さげに並んでいました。

「なぜにダオス！？」

しかも現代のカジュアルな服装が妙にマッチしていてなんか似合ってる。

「この人も転生者で、ファンタジアのダオスの容姿と能力を持っているの。だけど、すごく優しくていい人でね。お母さんに一目ぼれしたって言って、すごく情熱的に口説かれちゃったわ。」

そうやって頬を染めてはにかむ母を見て、だれがこの人を元男だと思う人がいるのだろうか。

そう思ってしまっても仕方ないほど、可愛らしいひとだ。

「だけどこの人・・・・・・キリヤさんって言うのだけど・・・・・・ちょっとドジなところがあってね。私と会っているときに限って電柱に顔をぶつけたり、なにもないところで転んだり、服のボタンを掛け違えたり、お買い物頼んでピーマンとパプリカ間違えたりしたのよ。」

それってちょっとなの？

「しかもそれがお母さんと一緒にいると緊張して、変に力が入っちゃうのが原因だと解ったときは、なんだかほっとけないって思っちゃってね。それであの人のプロポーズを受けたのよ。」

俺ｔｕｅｅｅ！や俺主役！みたいな事はなかったの？

「いいえ、むしろ私が言うまでここがリリなのの世界であることや、私が壱原侑子の容姿であることに全然気づかなかったくらいですもの。」

「それってどんだけ？もしかして、自分の能力も把握してなかったの？」

「その辺は大丈夫よ。この力は危険だから、制御訓練だけは怠っていないって言ってたもの。一度見せてもらったけど、ダオスレーザーも完全に使いこなしていたわね。」

「へ～、でもなんでその父さんが今は近くにいないの？」

私がそう聞くと母さんは少し顔を曇らせた。

あ、なんか不味いこと聞いてしまったのかな？

「お父さんは・・・・・・キリヤさんはね、今はとても遠い星でお星様になって私たちを見守っているのよ・・・・・・」

そう言って母さんは袖で顔を覆ってしまった。

そこで私ははっきり解った。

父さんは・・・・・・

「デリス・カーラーンで住民を導いているのね！」

ガタン！！ダダダダン！！！

私がそう結論すると、母さんはドリフのコントのように崩れ落ちた。

「な、なんでそんな結論になるの？」

「あれ、違うの？」

私が首を傾げていると母さんはなんだか頭を抱えている。

ダオスといったらダオスレーザーとデリス・カーラーンだと思うんだけどな。

「僕は普通の商社のサラリーマンなんだけどな・・・・・・」

そこにタイミング良く後ろから声が聞こえた。

私が後ろを向くと、スーツ姿に旅行カバンを引っさげたダオス・・・・・・恐らく私の父キリヤ・エヴァンスがいた。

苦笑しながらも、そのオーラは覇王や魔王のオーラ・・・・・・なんか微塵も感じないごく普通のサラリーマンにしか見えない。

「おかえりなさい、キリヤさん。出張お疲れ様！」

「ただいま、エリナ。はじめまして君の父親のキリヤだよ、よろしく。」

母さんが上機嫌で父さんに挨拶して、父さんもそれに応える。

うん、普通に仲睦まじい夫婦だ。

お星様になった云々は母さんの冗談なのだろう。

私はそう結論付けて、父さんにトコトコ近づく。

「初めましてソウル・エヴァンスです。よろしくお願いします、父さん！」

今の私は普通に笑えたのだろうか。
父さんはそう言った私を上機嫌で抱き上げてくれたから、第一印象はそれほど悪くないはずだ。
これから家族をやっていくのだから、険悪なのは避けたい。
いつか本当の家族になれるようにがんばるから、今はこれで勘弁してください。

父さん、母さん。

「ちなみにお兄ちゃんもいるから、そのうち紹介するわね。」

「え！？」

マジですか？

説明しましょ、そうしましょ（後書き）

キャラクタープロファイル

ソウル・エヴァンス
現在３歳
見た目女体化したソウル・イーターの幼女版。（コミック１７巻参考）
能力は大鎌になる能力と魂感知と退魔・・・・・なんだがソウル自身はそんなに使う用途を感じていない。
今回、結構動揺しているが本来はかなりのマイペースののんびりや。
こんなので自分の職人を見つけられるのかな？

エリナ・エヴァンス
ソウルの実母、二児の母。
前世は男だが、それを感じさせないほど女であることに順応している。
幸せな家庭を築いているのが何よりの証拠。
能力はｈｏｌｉｃの対価を貰って相手の望みを叶える能力。本人曰く、原作より若干劣化しているとのこと。
転生者の中では勝ち組。

キリヤ・エヴァンス

ソウルの実父、二児の父。
前世ではあまりマンガやアニメは見なかったようで、見覚えのあるキャラを見ても、そういえばいたな程度にしか思っていない。
能力はダオスの戦闘能力など。本人曰く危険な力なので制御訓練だけは怠っていないとのこと。
普通の会社のサラリーマンをしている。それでも部長なので結構えらい？

次回は男の子ｓｉｄｅ

ファーストコンタクト（前書き）

うまく書けない自分に呆れ、こんなＳＳに４人もお気に入り登録している人たちにびっくりだ。

ファーストコンタクト

男の子side

あのふざけた管理人に転生させられて、俺が始めて見たものは・・・・・・

「おや、この子は転生者かい。」

ジ〇リの湯婆でした。

「きゅおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！（なんじゃこりゃあああああああああああ！！！！！！！！！！）」

「あれあれ、こりゃ元気な子だ。」

獣の仔みたいな鳴き声を上げながら、俺は必死に体を動かす。
なんか体が思うように動かないけど、んなもん構うもんか！！
湯婆怖い！湯婆怖い！！

「あーあ、すごいパニクってる。ま、いきなり湯婆なんて見るから当たり前か。」

そこに俺は鈴を転がすような声が聞こえて、思わず体を止めると体がなにかに抱き上げられる。

「それにしても元ネタが獣大好き王女だからって、獣の子を産むとは思わなかったわ。」

そこにいたのは金髪の巻き毛にエメラルドのような緑の瞳の超絶美女がいた。
まるでこの世の美という美を、光という光を集めてつくったような・・・・・そんな表現でも物足りないほどの美しい人だ。
下手したらまるで人形のような印象を受けそうだが、快活そうな表情と仕草が彼女を人間だと知らしめる。

「初めまして、私は間宮（まみや）　珊瑚（さんご）。あなたの母親よ。そんでこっちが・・・・・」

「祖母の真珠（しんじゅ）じゃ。ようこそ異世界へ、我が孫よ。」

そう言われて俺はまるで場違いなことを思ってしまった。

湯婆はともかく、その容姿で日本人名似合わねぇ！！

あのあと、珊瑚さん・・・・・・母さんに（そう呼ぶように強制された。ナチュラルに心読まれてびっくりだ）人間の姿になれないのかと言われて、俺は初めて自分の姿に気づいた。
最初に上げた獣のような鳴き声はまさしく獣。
まんま王獣の子供でした。
流石にこれはねぇよ。
管理人の奴、なにが変身能力だ。
正体こっちで（王獣）、人間に化ける能力じゃねぇか！！
とりあえず、俺は言われたまんまに何故か解る能力を使って人間になる。
当然、赤ん坊の俺はそのまま母さんに抱き上げられた状態でお家に帰るのでした。
え？だったらそこはどこだって？
転生者ご用達の病院で俺は生後一日だと。そのおかげで病院で騒がれなくて済みました。
真面目に考えてこんな獣が人間から生まれたら大騒ぎだからな。

転生者が少なくとも５０万人もいたことにはびっくりしたけどな。

「あうあ～～～（なんじゃこりゃ～～～）」

お家に着いてみるとそこには某〇ブリの温泉宿がありました。
暖簾にご丁寧に〇の中に油って書いてあるし。

「ここが私たちのお家の間宮温泉宿よ。」

「わしが一代で立ち上げたんじゃ。中もなかなか充実しとるぞ。最新設備の防犯にさまざまな娯楽を取り入れたリクライニングルーム、温泉も天然のもので、食事は料亭のものと変らぬものじゃ。」

はい、中身は全然違う超高級宿ですね。

「宴会場は映画のを参考にしとるからなかなか広いぞ。」

そう言われて中を案内させてもらったけど、普通に趣のある温泉宿だよ。
そこかしこに最新技術らしきものが見え隠れしているけど、獣の感覚がなければ絶対に気づかなかったレベルだ。
お客様への安全第一！という配慮はさすがである。
そうやってあちこち見せてもらって最後に俺たちが住むプライベートエリアに案内された。
どうやら宿と一緒の奴みたいで、そっちも防犯は同じだけど中身は完璧に一般家庭だ。

「あ、おかえり。その子が僕たちの息子かい？」

俺たちが中に入るとリビングで帳簿をつけているメガネを掛けた無駄にかっこいい美丈夫がいた。
磨いた銅のような長髪を後ろに括り、優しげな風貌はメガネに若干隠れているにも関わらずその様が衰えていない。
下手したらただの優男にしか見えないのに、獣の感覚で大分鍛えているのがわかる。
この人、すっげー強い・・・・・・！！

「そうよ♪名前はまだ付けていないんだけど、あなたと同じ獣変身能力者だから、解らないことがあればなんでも聞いてね。」

「そっか。よろしく僕は間宮（まみや）　尋（ひろ）だよ。君の父親で獣変身能力者だ能力者よ。」

尋さん・・・・・父さんが俺を抱き上げてぎゅっと抱きしめる。
珊瑚さん・・・・・母さんとは違った安心と温もりを感じて俺はなんだか眠たくなってきた。
これが俺の家族との邂逅の終わりである。

家族との邂逅から3年経ちました。
俺は王牙（おうが）という名前を貰って父さんたちに宿の経営ノウハウを教えてもらってる。
え？その歳で早すぎじゃないかって？俺も思ったけど転生者だからか、知識はそれなりにあるし子供の頭は面白いぐらいに吸収が早いから、俺も嬉々として勉強してる。
前世じゃ勉強なんて嫌いだったのに、不思議な感覚だな。

「あ、王ちゃん。今日お客さんが来るわよ。」

ある日、母さんに唐突に言われて俺は帳簿をつけている手を止めた。
といっても本物じゃなくて問題集の帳簿だけどな。

「客？宿じゃなくてプライベートの？」

「そうよ♪お母さんのお姉さんが子供と一緒にこっちに挨拶に来てくれるのよ。」

「母さんに兄弟いたんだ。その人も転生者？」

「ええ、それも母さんみたいに姿だけの人じゃなくて、ちゃんと能力もある人よ。」

へぇ、ばあちゃんと父さん以外の能力持ちに会うの初めてだな。

転生者は3つに別れているらしい。
一つは母さんのようにキャラクターの容姿を引き継いでいるもの。
もう一つは容姿ではなく、能力だけを引き継いだもの。
3つ目に容姿、能力の両方を引き継いだものだ。
母さんは容姿だけ、ばあちゃんと父さんは容姿と能力の両方、俺は変化すれば変わるけど一応能力だけを受け継いだ形だ。
変身能力が原作にあったかどうかは今の俺ではもう解らないけどな。
あ、でもこの間ジ〇リの映画やってたからそのうちに出るかもしれないな。
元の世界のマンガやゲームなんかも何気に多いし、というかリリカル関連以外はほとんどあったぞ。

「そんでその人たちって何時ごろくるの？」

「というかもう来てるわよ。」

「はい！？」

それなら待たせちまってるじゃねえか！！

「はーい！エリナさんの登場！！」

いきなり母さんの後ろからテンションが高い女性が現れた！

つーか壱原侑子！！？

「おお、驚いてる驚いてる。やっぱり壱原侑子って有名キャラよね。そんでこの子が私の娘のソウルよ。」

有子さん・・・・・ちがったエリナさんの足元に俺と同い年くらいの女の子がいた。

特に人見知りするような様子もなく、淡々と俺のほうを見て・・・・・

「魔鎌のソウル・エヴァンスです。あなたが私の職人候補ですか？」

なんて爆弾発言をかましてくれました。

これが俺と生涯の伴侶となるソウルとのファーストコンタクトである。

ファーストコンタクト（後書き）

やっと更新できたー！！
自分の筆の遅さに絶望した・・・・・・・
頭の中では既に話が出来上がっているのに、それが文章にできないのが辛い。
というわけで、男の子と女の子が出会いました。次はこの続きかもしくは一気に飛ぶ可能性があります。
とりあえず頑張ろう・・・・・・
突然ですが、ソウルのお兄ちゃんは誰がいいかアンケート！
いろいろと案はあるんですけど、誰がいいかな～？というのを皆様に聞いてみたいと思います！

ＮＯ．１　Ｆａｔｅのギルガメッシュ
二話時点では子ギル姿。原作開始時点で大人ギル姿で登場。
能力は黄金律、カリスマＡ、王の財宝。
だが、王の財宝は空っぽで普段は倉庫代わりに使用している。

ＮＯ．２　ＨＯＬＩＣの四月一日君尋
四月一日が店長就任後の能力。侑子より弱いが対価と引き換えに願いを叶える能力。他ある程度の術や結界がつくれる。
特に『店』に括られているワケではない。

ＮＯ．３　幻想水滸伝のテッド
能力は弓術と真の紋章ソウルイーター。
呪いに関してはある程度制御できる。
原作のテッドの年齢辺りから不老となっている。

ＮＯ．４　Ｆａｔｅの衛宮士郎
能力は家事一般と投影魔術。固有結界はあるがそれは転生者本人のもの。
無限の剣製は自我崩壊を起すため・・・・・というか衛宮士郎だから作れるものだからなし。
カラーは士郎かエミヤはアンケート次第です。

ＮＯ．５　コードギアスのルルーシュ
能力は絶対遵守のギアス。制限は原作と同じだが、身体能力も原作と同じで下手したら女子よりない。
家事はかなり得意。頭の回転も良い方である。

ＮＯ．６　○マの渋谷有利
簡単な治癒術と強力な水の魔術が使える。
水の魔術に関しては上様モードで強力な力を発揮できるが、通常モードではある程度操ることぐらいしかできない。
野球に関しての運動能力に補正が掛かっている。

以上６名が候補です。
この中以外で希望がある方も歓迎です。
一応、ＳＳを乗せている全てのサイトで集めていますので、その合計で決めたいと思います。
皆様の協力、お待ちしております。

キャラクタープロファイル

間宮（まみや）　王牙（おうが）
王獣の変身能力を持った転生者。
外見は一般的な（よりちょっと整った顔立ち）黒髪黒目の典型的日本人。
現在は3歳。なのだが人生の墓場に半ば足を突っ込もうとしている。

間宮（まみや）　珊瑚（さんご）
ちょー美女と野獣のダイアモンドの容姿を持つ転生者。
特に能力があるわけではないが、絶世、傾国傾城、魔性などの言葉を出しても語りつくせないほどの美女。
TS転生者特有の悩みである性に対することは克服済み。
エリナとは姉妹である。

間宮（まみや）　尋（ひろ）
ちょー美女と野獣のジオラルドの容姿と獣の変身能力と剣の腕前を持つ転生者。
物腰が柔らかい偉丈夫の姿だが、剣の腕前は超一流。
珊瑚のことは最初から転生者だと知っていたが、それでも心から愛した剛の者。
間宮温泉宿の板前長でもあるので、料理の腕は一流。

間宮（まみや）　真珠（しんじゅ）

千と〇尋の湯婆の姿と能力を持つ転生者。
経営者として腕は一流。
特に守銭奴というわけではない穏やかな婆さん。
どちらかというと気質は元キャラの姉に近い。

婚約者と職人ＧＥＴ！

王牙ｓｉｄｅ

「あなたが私の職人候補ですか？」

そう言って爆弾発言したのは、今の俺と同い年くらいのすごく可愛らしい女の子。
この子も転生者だと言っていたけど、この歳くらいのＴＳ転生者は普通、自分が女であることが認められず男の子のような格好をしたがると聞いたけど、目の前の子は普通に女の子の格好をしている。
嫌がっているわけでもなく、諦めたような顔をしているわけでもなく、自然と着こなしている。
俺が訝しげに首を傾げていると彼女はもう一度口を開いた。

「問おう、あなたが私の職人か？」

「ってｆａｔｅネタかよ！！」

俺が思わず突っ込むを彼女はくすくす笑った。
その笑顔があまりにも鮮やかに見えて不覚にも俺はその笑顔に胸が一瞬高鳴った。

ってちょっとマテ！
落ち着け俺、相手は今はＴＳしているとはいえ幼女。
今は同い年でも幼女なんだ。
そんな相手にときめいてどうする俺！？
つーか、向こうは元男だ。母さんも元男なのは置いておいて、相手も俺と同じ感情を持ってくれるとは限らない・・・・・・って、な

んで付き合うことを前提で考えてんだよ俺は！！！？？？？

俺がいい具合にテンパっているとまたまた彼女から爆弾発言が落とされた。

「ちなみに前世でも女だったので男扱いは勘弁してくださいね。」

ソウルｓｉｄｅ

いい具合に混乱してるなぁ

それが私が挨拶しての彼・・・・・・王牙に対しての第一印象である。

どうも向こうは私の前世を男だと思っていたみたいで、私の言葉に目に見えてうろたえ始めた。

「え？え？だ、だって転生者は全員元男で・・・・・・でもお前は女！？え！？マジ！！？」

「マジだから落ち着いて。」

私がどうにかして嗜めていると、母さんは向こうのほうで王牙のお母さんと一緒にお茶やりながらこっちをニヤニヤしながら見ている。あれは絶対になにかを企んでる。

王牙はどうにか落ち着いたみたいで、なんか顔を赤らめながらこっちを見ている。

私は王牙を真っ直ぐ見ながらもう一度自己紹介する。

こういうのは大事だからね。

「もう一度自己紹介するね。私はソウル・エヴァンス。能力は大鎌への変身能力と魂感知と退魔。職人に関しては冗談だよ。」

「あ、俺は間宮王牙。能力は獣の奏者の王獣に変身すること。その・・・・・よろしく。」

王牙はそう言って手を差し出してきたので、私は反射的に手を握ってしまい慌てた。

「あ！しまっ！！王牙すぐに離して！！！」

「へ？」

慌てている私とは逆に王牙はきょとんとした顔をしている。

なんともない？

無防備な状態の私に触っているのに？

「王牙、その、手がしびれたり痛くなったりしていないの？」

「へ？とくになんともないけど？」

私はためしに王牙と魂の波長を合わせてみた。
驚くほどすんなりとシンクロできた。
初対面でこれだけシンクロできるなんて信じられない。
普通なら反発して少しくらいダメージを受けてもおかしくないのに・・・・・・むしろ王牙の波長がなんか暖かくてくすぐったい。
私はなんだかおかしくてまたくすくすと笑ってしまった。

「ど、どうしたんだよ。俺、なんか変なこと言ったか？」

「う、ううん。なんだか王牙の波長がすごく気持ちよくて、なんだかくすぐったいの。」

まだ笑い続ける私に王牙はそっぽ向いた。
でも手は振り解かれなかったから、イヤじゃないんだろうな。
私はそう勝手に解釈しながら、手を握り続けた。

「く・・・・・・くくくくあはははは」

「くすくすくすくす」

王牙まで一緒に笑い始めて、そうやって私たちは笑いあった。
こうして私たちのファーストコンタクトは無事に終了した・・・・・・・・・ら良かったのに！

王牙ｓｉｄｅ

「それじゃエリナ、約束どおりね。」

「解ってるわ珊瑚。」

俺とソウルがなんか笑いあっていると、母さんたちがなんかにんまり笑っている。
なんか嫌な予感がして、俺とソウルは手を繋いだまま後ずさりした。

「あら～なんで逃げようとするの？」

そんな如何にもなにか企んでますなんて顔していたら、誰だって逃げるわ！！

「あらあら、そんなに怯えなくても大したことじゃないわ。ただ私たちの約束にあなたたちが関わっているだけよ。」

「約束？」

エリナさんの言葉にソウルが首をかしげている。
なんかこのパターンってあれか？あれなのか！？

「・・・・・・まさか婚約者フラグ・・・・・・なーんてことが？」

俺が苦笑いしながら聞くと二人ともますます笑顔になった。
ま、マジですか？

「だってねぇ、転生者で前世が女の子ってそれだけでモテる要素になるのよ。他の奴らが原作キャラを落とせなかったときのキープになんかされたら堪らないもの。」

「だから、あなたたちが本当に好きな人が出来るまで虫除けの意味で婚約させようかな～って。」

「それに王牙くんとソウルの魂の波長があってるならますますよ。ソウルって家族以外だと反発してその度に調整してるもの。それじゃいくらなんでも可哀そうだからね。」

「それとも王ちゃん、あなたソウルちゃんじゃ不満なの？」

交互にそう言う母さんたちに反論しようにも虫除けなら反論のしようがないし、ソウルはなんか考え込んでるのか腕を組んで唸ってる。それよりなにより……母さんたちのオーラが怖すぎる！！！

「母さん、珊瑚さん。婚約者の件は一先ず保留でお願いします。」

「あら、どうして？」

「破棄前提の婚約とはいえ、その間に恋人ができたら相手にそれなりの遠慮があるかもしれないし、まわりが五月蠅くなる可能性もあるから。」

そう言ったソウルの顔はマジである。

あ、脈なしですか、そうですか……ってをい！！

「お、俺は別に婚約してもかまわないぞ！」

気が付いたら俺はそう叫んでいた。
自分でもなんで叫んでるのか不思議なくらいだ。
顔も熱いし、絶対真っ赤になってるぜ。
こら、そこの母親ーズ。ニヤニヤすんな。

「え？いいの？婚約者なんかいたら女の子寄ってこないよ？」

ソウルは難しい顔で首をかしげるが、俺はぶんぶんと首を縦に振る。
女の子が寄ってきて誤解されるより。このまま婚約者やって口説いたほうが全然いい。
というよりも好都合だ。

「お、俺はソウルがよかったら本当に婚約しても構わない！！」

ソウルｓｉｄｅ

「お、俺はソウルがよかったら本当に婚約しても構わない！！」

そう言った王牙の顔はこれ以上にないほどに真っ赤になっている。
これをしらばっくれるほど私だって鈍くない。

現世はもちろん前世だってこういうことを言われたことはない私だ。
好意自体はとてもうれしい。
それに私の能力は職人がいなければ意味がない代物。
王牙のことも短い時間だけど、悪い感じはしない。
まさかの職人と恋人の両方ＧＥＴ？

「うん、私も王牙だったら構わないよ。」

私も笑顔で了承してあげる。

「王牙、私の婚約者と職人。両方する覚悟はある？」

私の言葉に王牙が顔を輝かせたのは言うまでもない。

婚約者と職人ＧＥＴ！（後書き）

やっと更新できたー！！
今回はソウルと王牙の婚約話！
次回は一気に年数飛ばします。

更新凍結

大変申し訳ありませんが、こちらの作品の更新を凍結します。

理由といたしましては、ほとんど条件付けのない転生者ごっちゃまぜで、作者自身がわけがわからない状態になってしまいました。

そういうわけで、勝手ながら更新を一時やめます。

いや、もともと更新自体できていないのですがそれでもお知らせしておきます。

整理できましたら、更新を再開したいと思っています。

本当にお気に入りに登録していただいたみなさまには深く感謝とお詫び申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8089n/

武器と獣の狂想曲

2011年10月6日23時36分発行